



校長室だより 8号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【今週の行事】 5月10日(月) PTA二次集会
13日(木) 生徒総会
14日(金) 職員会議(閉校行事関連事業について)

【部活動紹介】 バレーボール部

- | | | | | |
|---|-----------|-----|------|-------------|
| 1 | 男子バレーボール部 | 旧顧問 | 福留 繁 | 20周年記念誌より抜粋 |
| 2 | 女子バレーボール部 | 旧顧問 | 山下俊文 | 20周年記念誌より抜粋 |

男子バレーボール部 (原文) 旧顧問 福 留 繁

男子バレーボール部は、昭和45年初代顧問、竹田誠二郎先生の指導のもとに発足した。この当時は、女子部と同様、青空コートで草取り、石拾いから練習はスタートしたようにきく。夏はあの真夏の暑い日ざしの中でのどの渇きに耐え、冬は南国宮崎とはいえ、北風の吹く中で寒さに負けるなど自分と戦いながら、「ワン・ツー・スリー」「レシーブ・トス・アタック」と白球を追い基本練習に汗を流したようである。現在もそうであるが、部員数は女子部には比較にならない少なさであった。しかし、これは女子生徒の多い商業高校としては、いかんともしがたいことで、ある時期は部員数が10名を割ることすらあった。

現在の状況は、部員数(昭和63年度)三年生6名、二年生2名、一年生13名の21名である。戦績は、まだ、ここに列挙するにはいたっていない。それは、一年生が主体で構成されているチームであるからであろう。三年生が抜けたあと新キャプテン(川口省三君)、副キャプテン(時枝芳樹君)を中心に「自分の生活に役立つバレーボール」を部のモットーにして、日南振徳旋風を巻き起こすべく毎日の練習に汗を流しているところである。

これが記念すべき創立20周年を迎えた「日南振徳商業高校・男子バレーボール部」の発足当時と現在である。

女子バレーボール部 (原文) 旧顧問 山 下 俊 文

女子バレーボールは昭和45年振徳商業高等学校の創立と同時に松浦良広先生を初代顧問に迎え発足した。部員は当時テレビ、サインはVの影響もあって、服部宏子キャプテン以下48名でスタートした。

もちろん体育館はなく今の情報処理棟の有るところにバレーコートをつくり、練習は石拾いから始まった。他校の体育館を借りるジプシー練習が続くなか46年県下大会(総体)に公式試合として初めて参加し、宮崎農業に2-0で勝ちバレー部のまくあけ

となる。

昭和47～51年まで松山典子先生が顧問をされ、49年第1回高校総体で当時県下最強チームといわれていた小林西に3回戦で敗れたが、小柄な振徳チームは河野律子キャプテンのもと、よくまとまり善戦した。また51年の新人戦では“言葉にならい”聞こえない”聾学校の生徒と1回戦で対戦し彼女らは監督、コーチ、審判、あるいは相手側の動きを懸命に全身で読み取りながら、ただひたすらにボールを追う姿に観衆はもちろん対戦していた振徳チームも感激し、思わず涙する場面もあり、何か大切なことを教えられた対戦でした。あの当時のOBたちが殆ど市内に残りママさんバレーや一般バレーで選手として活躍している姿がなつかしいとのこと。

昭和52年は武野きく子先生が顧問をされ、先生の専門は体操で一番苦手のバレーの顧問となり色々と苦勞されたようです、監督マークがなければベンチにも座れないことも知らず、試合場にいったあわてて監督マークを借りてベンチに座ったこともあった。総体では1回戦で敗れたが1年生大会では3回戦までいきました。頼りない顧問でしたが、生徒は練習にも熱心に取り組みました。1年間という短い顧問でしたが良い経験をさせてもらいました。あの茶色の制服を見かけるときふと昔のことを思い出すとのこと。

昭和53年～54年は福沢浩先生が顧問をされ54年の新人戦で3回戦までいきました。

昭和55年～59年は江川豊先生が顧問をされた。先生は宮崎国体の成年男子6人制の宮崎県代表チームのキャプテンとして活躍された先生でした。当時の振徳は陸上の全盛時代で全国制覇をするほど強かった。しかしバレー部の存在は薄く、はがゆい思いをしたとのこと。

本格的に強化を始めましたが、生徒は練習について行けず、退部する生徒がでたり、過呼吸症で何回も救急車で病院に運ぶことが続きましたが、56年に元気のよい一年生が入部し一年生大会でベスト4に入り、常にベスト8以上の成績が残せるようなチームの基礎ができてまいりました。そして58年の第10回高校総体では決勝リーグに進み、日大に2－0で敗れたが、泉ヶ丘に2－0で勝ち、宮崎女子にも接戦の末2－1で勝ち全国大会、九州大会への出場の夢がふくらんだが、日大、泉ヶ丘、振徳が2勝1敗となりセット率、得点率でおしくも3位となる。それ以後は常にベスト8の成績を残すことができるようになったのは、生徒自身が自分を向上させようとする前向きな努力とそれを支える保護者の協力があったからだと思います。今思えば苦しかったことの方が多いようだがそれ以上に多くの人たちとの暖かい心に触れ充実した5年間であったときく。

昭和60年は外山景嗣先生が顧問をされた。バレーボールのバの字も知らないままの引継ぎで、コーチという形で当時養護学校に勤められていた松元秀文先生に技術指導をお願いした。また卒業生の桑田、持原、古沢君らがよく練習の手助けをしてくれた。総体では2回戦で敗れたが、1年生大会では3回戦までいきました。短い期間でしたが色々と気をつかったとのこと。

昭和61年より『一心不乱』を部のモットーに頑張っているがベスト8が最高です。現在では部員もふえ教育的効果は認めるも、いまだに教育的バレーの域を越えることができず毎日練習に励んでおります。